

北のみち普請ワークショップ 及び北のみち普請寄合(フォーラム)開催 〈網走市(美幌町)・旭川市〉

平成18年12月8日(金)に「北のみち普請」ワークショップin網走(美幌)が開催され、また平成19年2月9日(金)には「北のみち普請」寄合(フォーラム)が旭川で開催されました。

網走(美幌)ではまちづくりに参加する各団体が様々な議論を交わし、旭川では「北のみち普請」の意義や地域のこれらについて考える、有意義な講演が行われました。

■ワークショップ in 網走(美幌)



今回は「ボランティア活動とまちづくりについて」「抱えている課題について」「活動をさらに発展させるには」という3つのテーマで、4つのグループに分かれ活発な議論が開かれました。

まずテーマ1の「ボランティア活動とまちづくりについて」では、「活動を通して満足感が得られる」「国道を花で飾ることで、自分たちの庭やまちをきれいにしようという町民の意識が高まった」など、プラスの意見がどんどん出されました。

「抱えている課題について」では、高齢化や「若者の参加が少ない」、あるいは「担い手の育成がこれからの課題」というのが、どのグループにも共通していたようです。

最終テーマの「活動をさらに発展させるには」では、「子どもを企画の段階から参加させてみては」「いろいろな団体が集える場を作り、道路や自然などテーマを絞って意見交換ができるようにしたい」、また「ボランティアサポートクラブに参加したところ、開発局からの応援が翌年からなくなり、官も民も一緒になってやるのが大切」など、率直な意見も出ていました。

最終的な取りまとめとしてマスコミを使って発信していくことの必要性や、ボランティアとはいえ資金調達の問題をどうしていくのかを考えること、また官と民のつながりはもちろんのこと、企業と地域住民の連携も重要であることも確認しました。

「北のみち普請」という、非常に誇りある活動を伝えたくても若者が地域に定着しないという現在の状況を憂える意見がある一方で、「観光のようなコミュニティビジネスや、環境を支えていくクリーンビジネスで、若者に自信を持たせ、定着させるような知恵を出してみては」といふ応援メッセージもあり、参加者の交流はさらに深まっていきました。

■フォーラム in 旭川



第1講演は『「地域の再生とみち普請」～ベルベツトアクションによる地域の協創～』と題して、北のみち普請を育てる会長でもある、小林英嗣北海道大学大学院工学研究科教授が行いました。

この中で小林会長は「自分がやりたいと思っていることが、実はたくさん地域に埋もれていて、自分の活動が地域の中で誇れるならば、結果として安全ですばらしい日本になっていくと思います。地域に暮らす人たちがお互いに顔を確認でき、共同体として安心して生活していければ、連携の中で地域も再構築できるはず。江戸時代、日本を訪れた外国人が、こんなにきれいで、こんなに安全な国はないと絶賛したそうです。街道をマネジメントしていた当手を振り返り、街道筋を再生しながら古い共同体を作り上げていこうという活動が行われています。北海道も道路を媒介に、地域経済や社会を支える担い手を作り出すことが、再生スタートの中心と考えていいでしょう」と、大変興味深い話をしていました。

休憩をはさみ、次にNPO法人ひがし大雪アーチ橋友の会理事などを務める、北海道教育大学生涯学習教育研究センターの今尚之氏は、『「北のみち普請 温故知新」～北海道の暮らしと道について歴史といまを知り、これからの考えよう～』というテーマで、熱っぽく講演。

長崎県五島列島での、地域のお母さんたちによる「子どもがぬかるみに足を取られないよう舗装道路を作った」という昭和25年頃の話は、地域のみち普請ともいえる事例でした。

また札幌の澄川地区の歴史にふれ「今から50年ぐらい前のことですが、馬車や馬そりで重いものを運ぶようになると、道が痛んだそうです。そこで地域の人たちが川から砂利を運び、道路に敷いたところ大層良くなった。つまり地域の人たちが連携して道路を直して誇りに思った歴史が、まちづくりの資源を見直すヒントになる」と、昔を知ることで新しい知識が増えることをさとしていました。